

嵐牛

友の会便り

第九号

2017.6.5発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤綱一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1] 作品鑑賞の一考
増田嘉伸
- [2] 柿園友垣抄(九)
加藤定彦
- [3] 講読・鑑賞の会
今後の予定
- [4] 嵐牛蔵美術館
近影

作品鑑賞の一考

増田 嘉伸

句・歌の一句・一首をも創ったこともない人間が、そのことに関して一文を作することは誠におこがましいことで、皆様の事跡を汚すことと十分承知しているのですが、伊藤会長さんの懇ろな原稿依頼に降参した次第です。

私は、専ら先人の書の真筆に触れることを楽しみに、懐具合と相談しながら、長年に亘って収集に努めてきました。郷土の名士の墨蹟を、同好の諸士と鑑賞する会を、数年に亘って開催してきました。作品の内容を繕きながら、作者の人間像を探り、併せてその時代を模索してきました。

多岐に渉る名士の職業分野から、今回は俳人について触れてみたいと思います。

古来、俳人は歌人と同様、生涯かけての宿願は、境涯の一句を句碑として残すことでした。又、色紙・短冊などにその作品を書くことを芸の一つとしてきたもので、それは、その書体が作品の文体(内容)と同様の価値を担うものとして評価されてきたことによるものです。したがって、世の愛好家は、その作品を読むということ以外に、「書かれた句」すなわち、その色紙・短冊のたぐいを見たい、できれば愛蔵したいという欲求をもつものなのです。しかし、そのことは簡単に果たし得るものではありません。私自身、積年の思いから納得できることであって、美術館巡り・展示会見学等その欲求を補うことができませぬ。

そうした中で「嵐牛・友の会」に参加させていただき、改めて生の作品に触れることができ、喜びに浸っています。大変有難く、感謝申し上げます。

以下、所蔵の数点の作品を紹介させていただきます。

作品1 鶴田卓池(つるたたくち)

二句

寒菊は

紙本

短冊



寒菊はしる人のしる香かな

卓池

誘ふ雲も

紙本

一〇九×二八



誘ふ雲もなくて宵々冬の月

青々卓池寫

作品2 伊藤嵐牛（いとうらんぎゅう） 四句

ふねとめて 二句

紙本 扇面

ふねを出て
身のちりはたく
小はるかな
こちふくやとほ
くなかれて
鳴かもめ
嵐牛



いなづまの

紙本 短冊



いなづまのあとの闇ふむ小みちかな 嵐牛

起出るや

紙本 短冊



起出るや火も出来雪も降さたに 嵐牛

作品3 松島十湖（まつしまじゅうこ） 二句

世の中の 紙本 短冊



世の中の勢さけて冬こもり 十湖

寒きくや 紙本 短冊



寒きくや花も葉も香もつゞまやか 十湖

（「嵐牛・友の会」会員）

柿園友垣抄(九)——柿園評月並の懇切な指導——

加藤 定彦

嵐牛の俳諧指導は、大雑把にいつて、①名簿を提出して正式に入門、師宅もしくは自宅などで連句の指導を受け、一門の年次集『そのまま集』に出句する者、②正式には入門はせず、もっぱら「柿園嵐牛評月並」に投句し、その選評により指導を受ける者、③入門して連句指導を受け、『そのまま集』と「柿園嵐牛評月並」の両方に句を投じる者、の三パターンに分類できる。

正岡子規の批判はともかく、月並句合は毎月の催しなので、投句側も判者側も気を抜かず、日々の精進が要求されるし、それを契機に正式に入門する者も少なくない。そのためもあって、嵐牛は月並句合の加評・添削には懇篤な態度で臨んでいる。寺社の奉納懸額・奉灯を名目に催された、不定期・単発の句合などを加えるならば、加点した句合は相当な数量とおもわれるが、募集チラシ、応募詠草、句合清書巻、高点句摺物(いわゆる丁摺)などがセットで伝わる例は意外に少ない。

先年、貫一・晴笠のご子孫宅で調査させて頂いた資料のなかに「柿園嵐牛評月並」の句合清書巻や丁摺合本が含まれており、貫一が最高点を獲得した句合清書巻(鈴木健治氏蔵)と晴笠旧蔵の合本中の嘉永六年(推定)六月分(全三丁、大竹裕一氏蔵)とが同じときのもとの判明した。嵐牛の評価傾向と懇切な添削態度を教えてくださいたい。以下に紹介したい。

* 句合清書巻は半紙本一冊、外題欠。全百六十九丁。各半丁に五句を記す。点印のある内、最低の三印「何人」に作者名はなく、五印は「何人」印と句の中ほどに朱の横線(中央に小半印)、所書と作者名。六印は「揮毫」印、所書と作者名。七印は「造化天工」印、所書と作者名を記入。ただし、すべて再出する作者名に所書はない。二組目以下の応募句は、最初の組(五句)の後に記し、五印以上の句に作者を「二ノ」「三ノ」などと記す。巻末部分は各半丁に嵐牛の筆で「白童子/樵者(印「嵐牛」)」「揮毫」印の十句、「造化天工」印の三句を所書・作者名とともに一句ずつ書き抜く。本文に朱で添削した句は、すべて「揮毫」の部に添削後の句形で記される―丁摺の勝者の成績欄では「ヌキ」(六印)と記す。

丁摺の表題・成績欄などは次の通り。

| | | | |
|------------|----------|----|----|
| 柿園嵐牛評月並六月分 | 句頁一千二百余吟 | 催主 | 螢堂 |
| 当季乱五句合 | | 素来 | 応山 |
| 七印ヲカサキ | | 人全 | 昔幼 |
| 天三 貫一 | 地三 波万女 | 順 | |
| 三三 | 五 | | |

以下、清書巻に作者名が記される高点句を、「五点ノ部」は百十三句、「巻中揮毫ノ部」は十句、「造化天工ノ部」は三句、巻軸に判者の句
麻かりやまつりの斎の洗ひ髪 嵐牛
を収めている。

清書巻により五印以上の添削例などを次に掲出する。句頭に評点を「六印」「七印」と記す。ほかは五印。

| | | |
|----------------------|--------|--------|
| 川越ば降ぬ艸木や夏の雨 | カモ | 文錦 |
| 流れ葉に付て迫るや水馬 | 二ノ | 波万女 |
| 風上が上座成らむすゞみ台 | 三ノ | (波万女) |
| はつ物の多き中には茄子哉 | 中泉 | 昔幼 |
| 舟こゝろ醒て涼し、風呂揚り | ヲカサキ | 寿童 |
| 瀟馬のいくつも来るや椴の花 | 々 | 二ノ(貫一) |
| 松明で登る日もあり夏の山 | サイコウ | 柳都 |
| 若竹や傘にはね行庵の道 | 日坂 | 石水 |
| 雷の音や答の開蓮 | 兵太夫新田 | 二ノ 月彦 |
| 〔六印〕 秋近し野に計り居て鳴乙鳥 | 二ノ | (其園) |
| 〔注〕 丁摺に中七を「浦風切て」と添削。 | | |
| 瀧まわりする間に暑き凌ぎけり | 五明 | 得岳(丁摺) |
| 〔七印〕 うつむけに剪て置けり百合の花 | 二ノ | 徳覚 |
| 花げしや見る気で行ば跡と先 | 日坂 | 青年 |
| なつ深き新壁暑し蛇の衣 | ならの | 英泉 |
| 〔六印〕 暑日や虫の食ぬく桐の苗 | 川上 | 帰雪 |
| 〔七印〕 物くれる人を寝待待鹿子哉 | 桂堂(丁摺) | 全(螢堂) |
| 〔六印〕 御立符の神酒にさす日や蟬時雨 | 浅羽 | 雨暁 |
| 〔六印〕 打水の忽かわく木の葉かな | 浅羽 | 鳳嶺 |
| 〔六印〕 大沼の乾く白ひや土用干 | 相良 | 吟一 |
| 高波の俄に來るや雲の峯 | 丹能 | 幽山 |
| | 完山 | |

鈴木家襲蔵の書留め『俳弟名前覚』によると、貫一はこの頃には地元グループの指導者だったようだが、贈られた清書巻の加評・添削に目を通し、的確・丁寧な姿勢に心服し、それが翌年の入門に繋がったのであろう。(嵐牛・友の会)顧問

講読・鑑賞の会 今後の予定

第十二回 六月十八日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 八月の友の会(見学会)について
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読

第十三回 八月二十日(日)

集合 嵐牛蔵美術館 乃至掛川駅
時間 午前九時ころ～四時三十分ころ
内容 磐田・浜松・二俣方面にて
嵐牛・芭蕉・十湖らの句碑と資料の見学
(詳細は六月の会で案内します)

※ 今月は会員の増田さんに原稿を寄せていただきました、
華やかな紙面となりました。どうもありがとうございます。
友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いことが
ありましたら、奮ってご投稿ください。



穏やかな日差しの下誇らしげに咲く ひと月遅れの臯月です
一面に咲く 臯月の庭(嵐牛庭園) 復活を目指して

平成二十九年五月二十八日

撮影

事務局 伊藤英子